

新訳科学的管理法 —マネジメントの原点—

フレデリック・W・テイラー著 有賀裕子訳
ダイヤモンド社 2009

商学部教授 伊藤 和憲

本書は、1911年の著書の復刻版である。アマゾンで同書が出ていることを知り、また、復刻版の原著がAKASHA Publishing, LLCから出ていることを知った。大学院生のとき、同名の翻訳書(上野陽一訳)を読んだことを懐かしく思い出しながら、どちらも購入した。

この著書を、新入生に薦める本に選択した理由はいくつかある。ひとつには、専修大学経営学部2年生の組織論を工藤先生に学んだ。経営学に興味を持たせてくれる授業であり、この著書の価値を教えてもいただいた。本書は、出版後100年経った現在も読むべき価値があるのは、「テイラーを知らずして、マネジメントを語るができない」からである。復刻版の帯に野中郁次郎先生がこう記している。まさにわが意を得たりである。

また、筆者が専門とする管理会計の原点は、原価管理と予算管理にある。その原価管理は、ツールとしての標準原価計算だけでなくマネジメント・システムとしての原価管理を学ぶ必要がある。そのためには、原価管理の根底にある科学的管理法がその理解を助けてくれる。



道ありき —青春編—

三浦綾子著 新潮社 1980 (新潮文庫)

商学部教授 奥村輝夫

三浦綾子は、「自分の心の歴史を書いてみたいと思う」といって「道ありき」を書き出した。著者自身の10数年に及ぶ闘病生活がストーリーの基におかれている。それは、いかにも重苦しく、悲しみに満ちた、どん底の闘いの歴史を連想する読者の期待を、見事に外している。むしろ「道ありき」には、未知なるものへの人間の期待があり、一条の光があり、そして希望があることを知らせてくれる。

人間はなんと知らず知らずのうちに、人を傷つけ、悲しませるものであろうか。人間の心はなんと移ろいやすいものであろう。弱いものであろう。生きるということは苦しく、また謎に満ちています、という読者への問いかけが頻繁になされている。でも、人間はね、一人一人に与えられた道があるんですよ。そして真剣とは、人のために生きる時にのみ使われる言葉でなければならないと思った、というのである。

どのようにつらく、希望などが一かけらもない、そのようなときにも、くだかれた魂を一ついだいて、人は人に出会えるのだという事を、「道ありき」は静かにつけているのである(同書解説より)。

幾度かの入院生活を強いられた若かりし頃の推薦者にとって、本書はなぐさめ、希望、勇気を与えられた一冊であった。青春編とあるように、これからの未来を切り開こうとする若いときに、是非読んでいただきたい一冊である。